

報告番号	甲 <input checked="" type="checkbox"/> 第	号	氏 名	Thanongsai Soukhamthat タノンサイ・ソーカムタット
主 論 文 題 名 :				
<h2>Sustainability Analysis of the Lao Faming System</h2>				
<p>(内容の要旨)</p> <p>近年におけるラオス経済の急発展の裏にはラオス農業における自然資源の過度な利用やその商業化があった。このもとで、ラオス農業は小農による自家消費を主目的とした多種作物の土地利用が全般を覆っていたものの中に、限られた商業作物を栽培する少数の大規模プランテーション農業が入り込むようになりつつある。しかし、この土地利用には農家の所得拡大策としての効果だけでなく、土地などの自然資源の利用における持続可能性の問題がある。このため、本論文は環境上、社会経済上および技術上の観点からラオス農業システムの持続可能性を分析する。</p> <p>環境上の観点からは、森林減少・劣化に由来する排出の削減(REDD+)を推進するための経済的なインセンティブ・メカニズムと貧困対策との関係を本論文は研究する。その結果、トウモロコシやゴムなどの商業作物の栽培が短期的には貧困の削減に有益であることと同時に、環境上のリスクを孕んでいることが示された。これと比較すれば、市場や人口といった条件の変化にさらされてはいるものの、陸稲栽培や非木材林産物採取のような伝統的な土地利用の方が持続可能性の点で優れている。これらの結果は、農業の商業化によるモノカルチャー化が長期的な環境コストが短期的な経済的便益を潜在的に相殺することを示している。したがって、REDD+のような環境保全的なインセンティブ・システムが森林維持に役立つ伝統的な土地利用を支援し、その経済的競争力を増大させることになることを明らかとした。</p> <p>社会経済的な観点からは、キャッサバの契約農業が貧困削減に対して持つ効果をサワナケット県とビエンチャン県を対象に分析した。契約農業は農業を近代化し、農村の貧困を削減するための有効な戦略としてある。しかし、多くの農民は教育の不足や契約自身の説明不足などの原因により、どちらの県においてもよく理解しないままに契約を結んでいるという問題がある。特に、この問題はサワナケット県における2+3モデルと呼ばれる不適切なやり方に見られる。そこでは農民たちは契約相手の要求によって資本の提供を求められて負債のリスクを負うこととなっている。加えて、この結果、他の作物に比べたキャッサバ栽培による1人当たりの実質収入が少なくなり、この地域におけるキャッサバ栽培の貧困削減に対する効果は少なくなっている。したがって、もしうまくマネージされなければ契約農業は農民を搾取するといった否定的な結果を招くこととなる。このため、公共セクターや関連団体などの第三者からの適切な介入が求められている。</p> <p>この2県におけるキャッサバ農業の技術効率性の分析も興味ある結果を導いている。たとえば、キャッサバ生産の弾力性は農場規模や労働力などの投入コストの増加関数となった。このため、労働力も土地も小さなものし</p>				

か持たない小農の経営は投資規模も小さいための困難も大きくなっている。特にサワナケット県では規模に関する収穫増が検出され、この傾向が強くなる。また、サワナケット県とビエンチャン県の技術効率性はそれぞれ75%と72%と推計された。さらに、ビエンチャン県の技術効率性の分析によって適切な農地の整備、栽培時期の選択、若年世代による耕作は技術効率性の改善に有益であることが分かった。

技術的な問題については、ルアンナムタ県における小規模ゴム農園を対象に規模の経済性についての研究を行っている。そして、その結果、ここでの規模の経済性は年を経るにしたがって減少することが分かった。これが示唆するのはこの地域のゴム農園は 大規模農場が競争の優位から小規模農場を併合する可能性である。こうした規模の経済性は経営の当初における整地や植林などの初期費用が非常に重要なことを示している。しかし、年とともに樹液採取や経営管理などの労働コストといった経常的なコストがより重要となり、最後には初期費用は sunk・コストとなって費用のほぼすべてが経常費用となる。そして、この時、小規模経営も大規模経営と競争可能となるのである。そのため、小規模経営が長期に生き残るには、その初期における大規模経営との競争に耐えられるかどうかにかかっている。これは、この時期における彼らのサポートが意味を持つことを示している。

こうしたラオス農業の持続可能性に関する研究は、商業作物の生産についてのこれまでの諸研究に新たな視点を付け加えている。ゴムやトウモロコシやキャッサバといった商業作物の生産は短期的には農家の貧困削減に役立つが、長期的には環境上の問題を引き起こす。対照的に陸稲や非木材林産物の採集といった伝統的な土地利用は持続可能性の点で優れてはいても貧困削減への貢献が小さなものとなっている。

大規模農業の小規模農業に対する土地利用上の競争的投資は土地と森林資源の長期的利用可能性に対するひとつの挑戦である。大樹穂農業も小規模農業もともに、環境や社会経済的影響、それに技術的視点を適切に考慮した投資を行うなら、それは貧困削減を含む社会の持続可能な安定化に寄与することができるのである。